（博士課程）

主論文要旨（和文）

（2000字程度）

報告番号	第　　号	氏　名	劉　笑倩

（要　旨）

視点による次元形容詞の使い分け
—「大きい・小さい」「広い・狭い」「高い・低い」「太い・細い」に関する考察—

キーワード：次元形容詞、視点、概念的把握、実際的把握、立脚点、注目する部分、見える範囲、主体性

1．研究の目的

空間的な量を表わす次元形容詞は、どの言語においても欠かせない基本的なものである。それは「深い」「高い」など、空間内に存在する対象の何らかの次元について、「深い海」「高い木」などと、その空間的な量を表すものである。

これまでの先行研究の中では、ある対象について視点の違いによる次元形容詞の使い分けという問題点が明らかにされていない。本研究は、ある同一の言及対象について複数の次元形容詞が使用される場合、—つまり、「狭い道」「細い道」の二つの表現が使用される場合—その使い分けがどのような基準によるものかを明らかにしようとするものである。。

本稿では、次元形容詞「大きい・小さい」「広い・狭い」「高い・低い」「太い・細い」を対象とし、これらの形容詞が「湖、川、谷、山、木、道、橋、建物、部屋、窓、テーブル、車、人、紙、皿、解答欄」の計16の名詞を修飾する場合を考察した。分析に当たっては、コーパスとインターネットの検索サイトを使用して実例を収集して資料とし、認知言語学の角度から「視点」等との関連性を検証する。

2．論文の構成

論文の主要な構成は、以下の通りである。

序論では、研究の目的・対象・方法及び論文の構成について述べる。

第一章では、次元形容詞に関する先行研究、及び本研究に関連する認知言語学の先行研究について述べる。

第二章では、分析方法・調査データの収集及び処理について述べる

第三章では、本論として、「大きい・小さい」と「広い・狭い」、「大きい・小さい」と「高い・低い」、「広い・狭い」と「太い・細い」の3組について、視点の違いによる次元形容詞の使い分けを分析する。また、コーパスの分布に見られた新たな知見についても触れる。

第四章では、第三章で論じた内容を考察し、結論を出す。

第五章では、最後に論文の全体的な内容をまとめ、また今後の課題について述べる。

3．各章の内容

第一章

第一章は、「1.1 次元形容詞についての意味研究」と「1.2 視点と捉え方に関わる認知言語学の研究」の2節からなる。

「1.1」では日本語の次元形容詞についての先行研究を紹介する。日本語の次元形容詞がどのような量あるいはどのぐらいの量を示しているのかについて述べたのは、国広（1969、1982）・西尾（1972）・森

田（1989）・久島（1993、2001）・小出(2000)などがある。その中で、西尾、森田と小出は、それぞれ対象語の意味を個別に分析しているのに対して、国広、久島は語の意味を分析した上で、それらの語の間にどのような関係あるかを体系化している。一方、久島は国広が体系化した語は一緒にされるべきものではなく、被修飾語によって、「物系」と「場所系」に分けるべきと指摘している。この他に、服部（1968）は『英語基礎語彙の研究』の中で英語と日本語の次元形容詞の意味を比較している。服部は、語としては「大きい・太い・厚い・広い・長い・高い・遠い」及びその対語を対象として、それらの意義素がどのように異なっているかを述べている。

「1.2」では「視点」、「主体化」など、本稿で使用する認知言語学に関わる理論的な概念を紹介していく。これまで、視点と捉え方に関わる先行研究の中で、Langacker （1987,1988, 2002,2011)をはじめ、さまざまな研究がなされてきた（深田・仲本 2008、山梨 2000、河上 1996、本多 2005 など)。そのうち、注目するのは、本研究で重要な役割を果たしている「視点」である。もっとも一般的な解釈は、「どこから見ているかというときの“どこ”をさす場合」と「どこを見ているかというときの“どこ”をさす場合」の２分類であり、文法研究では「視点表現の基本的な成り立ちの要素」に注目している。一方、認知言語学において、Langacker は、「視点」はものを見るときの指向性と位置の二つの概念を包括するとし、要に、視点の上にある存在を「どの程度主体的／客体的に解釈するか」を加えて「パースペクティブ」という概念を規定した。本稿では、「視点」に関する研究に基づき、「視点」を 4 つの要素を包括する概念と定義することにした。
①言語主体の立脚点
②言語主体から見える対象の範囲
③言語主体が注目する対象の部分
④言語主体が対象をどの程度的に主体的／客体的に解釈するか

このうち、3.1「大きい・小さい」「広い・狭い」における「視点」は①②③が関与する。
3.2「大きい・小さい」「高い・低い」における「視点」は①②③が関与する。
3.3「広い・狭い」「太い・細い」における「視点」は①②③④が関与する。

第二章

第二章では、「2.1　分析対象と使用するコーパス」と「BCCWJ のデータ集計方法」の２節からなる。
この章では本稿の考察対象（16 個の名詞）と、使用するコーパス BCCWJ 及び検索サイト Yahoo！について紹介する。また、これらを選んだ理由と、処理方法なども簡単に記述する。なお、分析対象の形容詞は「大きい山」のような連体修飾の形と設定して、用例を取り上げ分析している。

第三章

第三章は、「3.1　『大きい・小さい』と『広い・狭い』の使い分け」「3.2　『大きい・小さい』と『高い・低い』の使い分け」「3.3　『広い・狭い』と『太い・細い』の使い分け」の３節からなる。

各節において、主に次の５点を提示する。
① 「視点」の定義
② BCCWJ のデータ収集結果
③ 名詞群の特徴の異同の整理
④ 取り上げた用例の詳細的な分析
⑤ 分析のまとめ

なお、用例を検討した上、把握の方法を「概念的把握」と「実際的把握」の二つに分けることにした。

「3.1」:「大きい・小さい」「広い・狭い」と「湖」「建物」「部屋」「窓」「皿」「紙」「解答欄」の 7 つの語のそれぞれの組み合わせ（例えば:「大きい湖」と「広い湖」の使い分け）を含む文の使用状況を集計し、本節における「視点」の定義から分析した結果、次のような結論が得た。
①言語主体が、「視点」によって、対象の全体的な形を客観的に把握する場合:「大きい・小さい」の方を使う傾向が見られる。
②言語主体が、「視点」によって、対象を動作の行う場として捉える場合:「広い・狭い」の方を使う傾向が見られる。

③なお、皿、紙のような、人が入れない対象はについて「広い・狭い」が使用されている例では、言語主体が対象を、「動作を行う場」から「動作の結果、その上に対象物（移動物）が位置する場」と変えて捉えていることがわかる。

「3.2」:「大きい・小さい」「高い・低い」と「山」「木」「建物」「車」「人」「テーブル」「窓」の 7 つの語のそれぞれの組み合わせ（例えば:「大きい山」と「高い山」の使い分け）を含む文の使用状況を集計し、本節における「視点」の定義から分析した結果、次のような結論が得た。
①言語主体が、「視点」によって、対象の全体的な形を客観的把握的に把握する場合:「大きい・小さい」の方を使う傾向が見られる。
②言語主体が、「視点」によって、対象の高さを客観的に把握する場合:「高い・低い」の方を使う傾向が見られる。

「3.3」:「広い・狭い」「太い・細い」と「道」「橋」「川」「谷」の 4 つの語のそれぞれの組み合わせ（例えば:「狭い道」と「細い道」の使い分け）を含む文の使用状況を集計し、本節における「視点」の定義から分析した結果、次のような結論が得た。
①言語主体が、「視点」によって、対象の全体的な輪郭を客観的に把握する場合：「太い・細い」の方を使う傾向が見られる。言語主体は視点によって対象を動作の行う場「面積」または「幅」として捉える場合：「広い・狭い」の方が使う傾向が見られる。
②言語主体が「道」「橋」「川」の場の中にいて、その線に沿って移動しながら観察対象を捉える場合、「主体化」と「スキャニング」など概念が適用される。
③「広い・狭い」の表現では主体性の度合いが高く、「太い・細い」の表現では主体性の度合いが低いと考えられる。

また、集計結果から、「広い道」「狭い道」「細い道」はいずれも多く使用されているのに対し、「太い道」はほとんど使用が見られなかった。つまり、「太い道」と「細い道」の使用は明らかに非対称であることがわかった。

第四章　結論

以上考察の結果、次のような結論が得られる。
① 言語主体と観察対象の場所の相対的な位置、つまり「立脚点」が次元形容詞の使用に影響を与える。
② 言語主体から「見える対象の範囲」、及び言語主体が「観察対象のどの部分に注目するか」が次元形容詞の使用に影響を与える。
③ 言語主体の観察方法によって、「スキャニング」という概念が一部の次元形容詞に有効である。
④ 「広い・狭い」と「太い・細い」の使い分けにおいては、「主体性」の度合いから見た言語主体の視点は、対象への解釈において重要な役割を果たす。

第五章　終わりに

以上、本研究では、3 組の次元形容詞「大きい・小さい」と「広い・狭い」、「大きい・小さい」と「高い・低い」、「広い・狭い」と「太い・細い」が 16 個の名詞を修飾する用法を、なぜ同じ対象に対して次元形容詞の使い分けがあるのか、どのような基準によって使い分けが行われているのかを「視点」の概念を中心に認知言語学的アプローチに基づいて検討した。
今回の調査は、例文の量と質が必ずしも十分とは言えない。今後さらに大規模な調査を行い、分析対象とした形容詞の意味用法を明らかにする必要があると考えられる。